

臨床部門

臨床心理学の研究動向および今後に向けて
— 社会的要請に応える実践のために —黒 沢 幸 子
(目白大学)

はじめに

本稿では、2008年7月から2009年6月までの1年間にわが国で発表された、臨床心理学に関係する諸研究の全体的傾向とその成果を展望する。ここで取り上げる論文としては、2009年に開催された日本教育心理学会第51回総会での発表論文、および学会誌である『教育心理学研究』『心理臨床学研究』『カウンセリング研究』『心理学研究』『発達心理学研究』『家族心理学研究』に掲載された研究論文の中から、臨床部門に属すると思われる論文、さらに、臨床心理学の実践の場が閉ざされた相談室から開かれた社会場面に拡大しており、コミュニティ心理学の視点や効果的・効率的で協働的な実践の姿勢が求められてきていることを考慮して、『コミュニティ心理学研究』(第11巻1, 2号)と『ブリーフサイコセラピー研究』(第17巻1, 2号)に掲載された論文を加え、現代的ニーズに沿った研究動向を探索していきたい。

I. 論文概観の軸

本『年報』には、臨床心理学部門と近接するものとして、発達部門、人格部門、特別支援教育部門、学校心理学部門が設定されているが、同一論文が部門にまたがって取り上げられることを避けるため、他部門で扱われる可能性があるもの、例えば、発達や人格に関する研究、広汎性発達障害やAD/HDなど発達障害や療育などの研究、学校心理学に関する研究(学校適応、学校ストレス、教師のストレス、学校システムに関連するもの、およびそれらと関連するいじめ、不登校、また学校場面での支援・連携など)などは原則として除外した。ただし、ここで取り上げることに意義があると考えた研究は、重複を恐れず取り上げた。

下山(2001)は、臨床心理学研究を、「実践に関する研究」(アナログ研究や効果研究によって、その技法やモデルの一般性や効果を検証するもの)と、「実践を通しての研究」(事例研究やフィールドワークによって実践の方法やモデルを提案するもの)とに大別している。本稿における文献引用の流れは上記の順により、テーマごとに、まずより「科学性」を重視する「実践に関する研究」を取り上げ、それらを「実践性」

につなげる視点から見直す。次に、「実践を通しての研究」,なかでも社会的課題の改善を目指したアクションリサーチ、および研究デザインの明確な実践的研究を主に取り上げる。紙数の関係もあり、1事例研究は除外した。

II. 学会発表論文および学術研究論文の展望

1. 心理的不適応・精神症状に関する研究

(1) 抑うつ

黒田・菊川(2009)は、抑うつスキーマの受容が抑うつを低減することを見出した。この結果は、認知の修正が主な関心となっている認知療法に対し、その受容を促すという介入の有効性を示唆するものであり、来談者中心療法との接点をも示唆する。

岡村・清水(2009)は、「ミスへのとらわれ」と、「ネガティブな反すう(NR)」および「精神的健康」との関連を見出しながら、「高目標設置」はNRと精神的健康悪化に対して抑制要因として働き、「不合理な信念」は増幅要因として働くことを示した。一方、福井(2009)は、「高目標設置」の「心理的健康」に対する影響は一律ではなく、「高目標設置」「ミスへのとらわれ」「行動懸念」の3特性のバランスと、「成人愛着スタイル」との組合せが、心理的健康を左右するとした。

林(2009)は、先延ばし後に生じる否定的感情を経験した場合、抑うつ感情や不安感情が経験されることを示した。この結果は、「自動思考媒介仮説」を支持するものであるが、「内容特異性仮説」は部分的にしか支持しない。

加曾利(2009)は、略画法等を用いて、抑うつ傾向の高い大学生に生じる自動思考の種類と内容を、否定的感情を生じる状況別に抽出した。

細越・小玉(2009)は、「対処的悲観者」は「方略的楽観者(SO者)」と同様、十分健康的であることを示し、自尊心などの自己評価的側面は、悲観的思考をさらに受容することができれば、SO者と同等まで高まることを示唆した。

外山・市原(2009)は、「防衛的悲観主義(DP)者」を目標達成に基づいて3群に分け、その不安とパフォーマンス

スを比較した結果、「習得回避高群」は不安が高く、パフォーマンスが低いことが示された。この結果は、DPのタイプによって精神的健康度が異なることを示唆する。

奥村 (2008) は、情動への否定的評価 (他者懸念と負担感) が、認識困難・言語化困難傾向と関連することを示し、「情動への評価」は、情動が適応的に機能するか否かに重要な役割を担うことを示唆した。

(2) ストレス

(a) ストレスの自己統制モデル

佐藤 (2009) は、大学生におけるストレスの心理的自己統制メカニズムについて、横断・縦断調査により検討した。ストレスモデレーターは、ストレス度の高低に応じて、モデレーター量を効率的に維持できるようその構造を変化させており、それによりストレスを自己統制している可能性が示唆された。学生支援への応用が期待される。

(b) ダイエット行動

幸田・菅原 (2009) は、大学生女子を対象として、「ダイエット行動」と「むちゃ喰い (BE)」の悪循環について示した。発端がダイエットであれストレスであれ、BE がダイエット行動を助長することによって悪循環過程は発生し、ストレスが慢性化していれば、たとえダイエットを止めても、悪循環過程は活性化し続け、BE から容易に抜け出せないことを示した。社会文化的背景をも考慮することが、今後の研究課題である。

(c) バーンアウト

看護師を対象としたバーンアウトを促進/抑制する共感性の次元の研究 (小堀, 2008)、および職業・組織コミットメントとバーンアウトとの関連の研究 (澤田, 2009) が報告されている。

(3) 家族関係と精神的健康 (抑うつ・不安)

(a) 青年期の精神的健康と家族との関連

鈴山・徳田 (2009) は、青年期の不安に対して、家族に対する評価、凝集性、家族内コミュニケーション、家族システムの柔軟性は直接的に影響を及ぼし、夫婦関係は、家族システムの機能状態を媒介要因として、間接的な影響を及ぼすことを示唆した。

川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤 (2008) は、男女ともに、両親間葛藤が深刻なほど子どもの巻き込まれ感が強まり、自己非難や恐れ認知につながるが、抑うつとの関連では性差が見られ、同性の親との情緒的つながりが重要であり、夫婦間の葛藤認知は子どもの抑うつとは直接関連がないことを示した。

(b) 母親の抑うつ・育児ストレス

安藤・無藤 (2009) は、産後1年までの抑うつと養育態度について妊婦を対象に調査し、対児否定感是不適切な

養育と関連し、抑うつおよび夫婦関係も対児否定感と不適切な養育に関連することを示した。母親の抑うつ予防、夫婦関係の改善と強化の2点が提起された。

小林 (2009) は、乳児を持つ母親の育児関連ストレスは母親の抑うつ傾向と直接関連するが、ストレスコントロール可能性が低くても、夫からのサポートが多い母親は抑うつ傾向が低いことを示した。抑うつ予防には、母親自身がストレスコントロール可能性を認知すること、コントロール困難な場合は夫からのサポートが有効であることが示唆され、産前教育の必要性が考察された。一方、熊澤・濱口 (2009) は、母親の育児ストレスは父親からの情動的サポートの多さから悪影響を受ける可能性があること、育児経験によりマルトリートメント傾向が軽減されることなどを見出し、育児支援の方向性について考察している。

三鈷・濱口 (2009) は、親の養育スキルパターンにおいて、母親の感情的叱責や攻撃的行動が多いほど幼児期の子どもの引きこもりや攻撃的行動などの問題行動傾向が高くなり、父母が子どもによく注目し援助的な関わりを持つほど子どもの向社会的行動が多い可能性を示唆している。

(4) 社会不安・対人不安

城月・笹川・野村 (2009) は、社会不安障害 (SAD) への心理学的介入として、エクスポージャーに加えて認知的介入を加えることが必要かつ有効と考え、スピーチ場面に関する否定的見積りに注目し、それがSAD症状の維持に参与するプロセスについて検討した。他者からの否定的評価への恐れのみならず、スピーチに関する否定的見積りがSAD症状に影響し、それがさらに対人交流場面などの不安に影響を与え、二次的な抑うつを生じさせるという包括的モデルを示した。今後、実際のスピーチ場面での検討、およびSAD症状への介入研究が求められる。

大西 (2008) は、対人不安と罪悪感との関連は低いのに対し、対人恐怖的心性は罪悪感との関連が高く、なかでも精神的罪悪感との相関が最も高いことを見出し、両概念が罪悪感により弁別されることを示した。多くの臨床家によって、対人恐怖は対人不安とは異なり、恥の意識と対人関係を重視する日本文化の特質と関連していると指摘されているが、これが一部実証的に確認されたといえよう。今後、欧米との比較文化研究が望まれる。

牧・坂井 (2009) は、大学生において、理想自己と現実自己とのギャップの大小ではなく、そのギャップをどう認知しているかが、対人不安 (特性シャイネス) に影響を与えている可能性を示唆した。

(5) 引きこもり

蔵本 (2008) は、引きこもり群と大学生群を対象に質問紙調査を行い、社会的引きこもりに関与する心理的特性として、「対人交流開始の困難」「こだわりの強さ」「対人交流維持の困難」「感情的冷淡さ/無関心」の4因子を抽出した。判別分析で、これら4因子により全体の81.1%が引きこもり群に正しく分類された。「対人交流維持の困難」は判別に最も寄与しており、このことは、引きこもり本人への訪問アプローチなど支援のあり方に示唆を与える。引きこもりの心理的特性に関する数少ない実証的研究である。

(6) 虐待・心的外傷・施設入所児

大原・楡木 (2008a, 2008b) は、児童自立支援施設入所児童の被虐待経験と行動特徴や非行との関係を検討した。全国の児童自立支援施設と一般の中学・高校を対象に、担当職員および学級担任に Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL) などの質問紙調査を行った。その結果、入所児童は統制群に比べ、すべての種類の虐待を重複して経験し、性的虐待群には引きこもり・性的非行・学校内暴力が見られ、高重複虐待群は過去に非行を幅広く行っているなど、虐待の重複傾向と非行との累積的關係が見出された (大原・楡木, 2008a)。また施設群は、統制群に比べ「引きこもり」「不安・抑うつ」など、「身体的訴え」を除くすべての CBCL 尺度で高得点を示し、施設群の中学生は外交尺度に問題を抱えるなどの行動特徴が見られ、生活場面での十分な配慮と支援、心理的援助の必要性が指摘された (大原・楡木, 2008b)。

出野 (2008) は、児童養護施設の中中学生への調査から、女子は男子より心的外傷性症状が強く、両価性の愛着特性が症状を強めていることを示した。男子は、高年齢・低入所年齢・高両価性であるほど、女子は、高両価性・高回避性であるほど、心的外傷性症状が強かった。一般中学生との比較、被虐待や離別体験の種類・程度との関連性の検討が、今後の課題とされた。

児童養護施設児が「子どもの権利」をどう理解し、職員や生活についてどう感じているのかについて面接調査が行われ、特に小学生には権利に関することがほとんど理解されていないことが示された (田丸・内藤・高橋, 2009; 内藤・高橋・田丸, 2009; 高橋・田丸・内藤, 2009)。

子ども虐待の第一発見者に保育士がなる可能性も多く考えられるため、笠原 (2009) は、保育園内での虐待判断、報告、通告に関する保育士の意味決定過程に影響する要因を検討した。

(7) 非行・逸脱行動

中学生の逸脱行為について、中学生4,483名の自己申告による縦断データから、「非行性の深化」は軽微な逸脱

行為時点から始まる可能性が示唆され、軽微な時点での効果的な介入が重篤な逸脱行為の生起を回避させる可能性が実証された。さらに非行性深化の関連要因として、「逸脱行為をする友人の存在」「学業能力」「親への愛着」が示された。また、逸脱行動に関して、「自己価値の低下」あるいは自己価値を不当に高めようとする「自己価値の変動」が、問題の生起を予測する因子となる可能性が示された (西野・氏家・二宮・五十嵐・井上・山本, 2009a, 2009b)。非行予防のためにも、子どもたちの逸脱行為について、対象を縦断的に追跡した実証研究は貴重である。今後さらに、非行行為の促進や緩衝についての因果モデルの検討などが求められる。

鈴木・鈴木 (2009) は、中学生の物質使用について、従来から指摘されている親の養育スタイルの応答性による抑制効果は私的自己意識が高い場合にのみ認められ、私的自己意識が低い場合はむしろ甘やかしとなって、物質使用という逸脱行為が助長されることを示唆した。

(8) パラノイア・境界性人格障害

津田 (2009) は、関係妄想的認知の生起について、低い社会的スキルが情報不足を引き起こし、それが情報を補完するための反芻を駆り立て、その過程の根底には猜疑心があるという仮説モデルを提示し、その妥当性を得た。反芻による逸脱増幅過程は、了解不能性を増強し、妄想発展の可能性につながるなどのパラノイアスペクトラムの立場が理論的に支持された。今後は実験的研究が必要だが、倫理的配慮が求められる。

田村・井上 (2009) は、境界性人格障害 (BPD) 群の特徴について、BPD 群を含む精神科外来患者を臨床群、学生を健常群とし、質問紙を用いて対象者の主観的な体験を数量化して比較した。BPD 群に特異的な症状は身体感覚の異常と自傷行為であり、それらは、否定的な感じやすさ・恐怖感・内面の空虚感等との関連が強かった。BPD 群は、幻覚・自我漏洩感の程度が統合失調症群と同程度であり、臨床群は、陰性感情の統制が困難であることも示された。

(9) その他

(a) 同性愛

同性愛は、性的指向であり治療対象とは見なされないが、社会的少数派であり、抑うつ、不安、自殺、依存症などが問題視され、サポートが必要とされるものの、日本での研究は少ない。梶谷 (2008) は、同性愛女性を対象に半構成的面接を実施し、自己受容過程で自己イメージの形成が難しく、女性のセクシュアリティの受容の問題、内在化された同性愛嫌悪感情の影響を示唆した。

(b) 難病支援・障害者の精神的健康

菊岡 (2008) は、既存の援助理論によらず、多発的硬化

症患者の語りを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、患者自身に役立つ心理援助を考察した。ピア(同疾患患者)の存在、家族や医療従事者など周囲の人との関係性からの影響、患者の主体性の尊重が重要であることが示された。

藤田(2009)は、青年期障害者の精神的健康について、先天性、後天性、障害なし群の比較から検討した。障害者の楽天性は高かったが、健常者以上に他者信頼が精神的健康に関係していることが示された。

2. アセスメントに関する研究

(1) 投影法

(a) アセスメント法の精緻化

佐渡・坂本・伊藤(2009)は、大学生を対象に、バウムテストの幹先端処理を検討した結果、性差はなく、年齢の影響を受けやすく、3つの処理型が診断的有用性を持つ可能性を示唆した。

福井・三宅・岡崎・森津・遠山・山下・岡田・安藤(2008)は、大学生を対象に、集団的スライド提示による図版評定法を用いて、ロールシャッハ・テストにおける父親・母親図版解釈仮説について検討した。結果、VII図版の母親図版解釈仮説は支持されなかった。

寺崎(2008)は、高校生40人に対してロールシャッハ・テストを施行し、成人に比べて人間運動反応(M反応)が少ないという高校生の特徴が、必ずしも病理や不適応を意味しないということを示した。

(b) 精神障害の病理・特性

青木(2009)は、心的外傷性障害の既往者を解離の有無で2群に分け、その心的特徴について、ロールシャッハ・テストを用い、統計的に比較した。その結果、心的外傷者は解離症状がなくても解離機制が生じている可能性が示唆され、その支援上、早期査定・早期介入に加え、解離の段階を見極めた介入が重要であることが考察された。

児玉(2009)は、性同一性障害(GID)の自我境界と自己イメージについて、ロールシャッハ・テストを用いて検討した。GID当事者全体では、安定した積極的な努力家であり、強い精神病理は認められず、現実検討能力の保持が見出された。GID者へのサポートには、広い視野と柔軟な対応が重要である。

(2) 尺度、評定表の開発・作成

(a) 病理のアセスメントや障害のスクリーニング

下坂(2009)は、回避性人格障害と連続性を持つ、より一般的な人格的特徴を回避性人格傾向とし、この概念を測定する尺度を作成した。14項目、1因子モデルが支持され、その簡便性に利点があり、不登校、対人不適応などへの利用可能性も考えられた。今後は、病理群のデータ収集などが必要とされる。

西村・東條(2009)は、摂食障害発症リスク・スクリーニングテストと食行動異常の関係を検討し、一定の妥当性を確認した。

(b) 障害の改善や心理療法の介入レベルの評定

篠原(2009)は、アルコール依存症者への援助のために、Denial Rating Scale (DRS) をもとにした否認と気づきの段階評定表(「自己との向き合い」「家族や周囲の人との関係」「援助者との関係」の3領域、8段階評定)を作成した。アルコール依存症者への援助に際し、否認を見立て、どのような気づきを促すかの足がかりになることが期待される。

松本(2008)は、イメージ療法における「イメージ体験の深まり」のレベルを5段階で評定する尺度を作成した。イメージの体験過程レベルは、想像活動への関与、受動的注意集中などと関連が強かった。

(c) 臨床への利用可能性が考えられる尺度

鈴木・木野(2008)は、共感性の多次元的アプローチに基づき、他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向をそれぞれ他者志向性・自己志向性の視点から弁別的に測定しうる尺度を作成した。

加藤・谷口(2009)は、「許し尺度」を開発した。犯罪犠牲者等への許しに焦点を当てた臨床実践など、許し研究の進展につながることが期待される。

石坂(2009)は、「死の意味づけ尺度」を作成し、臨床現場への貢献可能性を考察した。

3. 介入プログラムや心理療法の技法の実践に関する研究

(1) 介入プログラムの実証的な効果研究

(a) 暴力被害による PTSD への治療的介入

吉田・小西・井口・加茂(2008)は、性暴力とドメスティック・バイオレンスの影響で外傷後ストレス障害(PTSD)に罹患している被害者女性10例に対して、Prolonged Exposure Therapy (PE療法)を適用し、その有用性を検討した。PE療法を完遂した9例中8例は、治療前よりもPTSD、抑うつ、解離の症状が軽減、うち5例は寛解した。またその治療効果は、フォローアップ時点でも持続していた。PE療法は、暴力被害女性のPTSD症状と解離症状、特にPTSDの回避症状や再体験症状に効果があり、有効な治療法であると考えられる。

(b) 児童・生徒への抑うつ予防(軽減)プログラム

佐藤・今城・戸ヶ崎・石川・佐藤・佐藤(2009)は、児童の抑うつ症状に対する担任教師による学級規模の認知行動療法プログラムの有効性を検討した。小学校5～6年生児童を介入群と統制群に割り付け、介入群に対して、心理教育、社会的スキル訓練、および認知再構成法などの9セッション(1回45分)の集団プログラムを実施した。結果、介入群の抑うつ症状は大きく低減し、社会的

スキルと認知の誤りにも改善が見られ、抑うつや認知行動的対処に関する理解度が高まった。中学生に対しても、類似の、担任教師による抑うつ予防プログラムが実施され、社会的スキルの獲得、認知の変容、抑うつの軽減に効果が認められた(戸ヶ崎・石川・尾形・佐藤・佐藤, 2009)。今後は効果の維持の検討が課題である。

中学生を対象とした抑うつ低減プログラムは、角・小関・高橋・山口・丹野・石垣・佐々木・嶋田(2009)によっても行われており、ここでは推論の誤りに焦点を当てた認知的心理教育が実施された。効果の維持を見るために、介入前後に加え、1カ月後、4カ月後に調査が行われ、抑うつ得点の軽減が維持されたが、それに対する推論の誤りの影響は明確ではなかった。

(2) 治療同盟と面接評価の要因

吉見・葛西(2009)は、17名のセラピストとボランティアのクライアントを対象として、治療同盟と面接評価に影響を及ぼすクライアント側の要因を検討した。アンビバレント型は治療同盟の意識化が困難で、面接の深さは感じられないなど、クライアント側の対人関係スタイルと認知的反応がセラピストとの関係性や面接評価に影響することが示唆された。

(3) 心理療法技法の有効性の検討や示唆

(a) フォーカシング, 沈黙

山崎・内田・伊藤(2008)は、自己の内面に注意を向ける特性はフォーカシングの態度を経由することで抑うつに負の影響を与えることを示し、内面へのフォーカシングの態度が抑うつから自己を守る可能性を示唆した。

高沢・伊藤(2009)は、フォーカシングの空間づくりが精神的健康に及ぼす影響について大学生を対象に検討した結果、空間づくり群(3日に1度、計10回実施)は、他群に比べ、GHQ総得点、社会的活動障害、うつ傾向の得点が低かったが、症状によってその効果の度合いが異なることが示された。

桜本(2009)は、沈黙について6名の試行カウンセリングから、沈黙は体験様式やプロセスの変化の機会となり、沈黙において外的な事柄を想起したり問題の知的な吟味を行うよりも、フェルトセンスに直接リファースする方が創造的で発展的な展開が生起することを示唆した。

(b) 高齢者の回想法

野村(2009)は、地域高齢者に対する個人回想法の効果について検討した。デイケアに通所する無作為抽出された高齢者を個人回想法施行群と対照群とに割り当て、施行群は1回30～60分の回想法セッションを5～6週間にわたり受けたところ、セッション前後で有意な自尊感情の上昇が認められた。個人回想法は、認知症を伴わない高齢者の自尊感情を維持、向上させるツールとなりうる

ことが示唆された。

(c) ブリーフセラピー

鈴木・皆川(2008)は、ソリューション・フォーカスト・アプローチ(SFA)におけるクライアントの満足感について、主な面接技法がSFAである群とnon-SFA群(精神分析、認知行動療法)の双方のクライアントを対象に、協働問題解決満足感尺度による検討を行った。SFA群では、クライアントの満足感、自己認知の変化、他者との一体感が有意に高かった。また満足感に影響を及ぼす変数の影響力と種類が両群で異なり、SFAの特徴が明らかとなった。

下田(2008)は、SFAの代表的な技法であるスケーリング・クエスチョンを用いて、中学生の受験期ストレス下での「元気度」を評定させ、その数値の特徴に関して統計的に検討し、この技法の性質を考察した。

黒沢(2008)は、SFAの理念や技法を応用し、学校コンサルテーション手順の8ステップモデルを開発した。訓練ワーク3事例のプロセスと結果から、コンサルティの自信と客観性が増し、ケース対応への具体的指針が確認され、実践モデル・訓練モデル両方への利点と、一部の課題が検討された。

また、総説であるが、岡田(2009)は、ブリーフセラピー技法を効果的に行うために重要な点や、性急な介入が生じやすくなる留意点について、「関係性理論」を引用しながら考察した。

(4) 社会的要請の大きい課題への介入プログラムの開発と実践

社会的引きこもり事例への旅行療法により、重篤度、社会参加、家族のGHQ得点が有意に改善し、旅行を使った支援活動が有効であることが報告された(島・栗山・鶴, 2009)。

藤木(2008)は、更生施設において、従来型の支援だけでは社会復帰できない無業者(ホームレス経験者など)に対する支援として、ソーシャルスキル・トレーニングをベースにした社会復帰支援プログラム(グループワーク)を提供し、一定の有効性を見出すとともに今後の課題を示した。

安部・大谷・長谷川(2008)は、従来のアルコール依存症治療では断酒の動機が持てず、専門治療から脱落して死に至る患者も多いことから、解決志向ブリーフセラピーを取り入れたアルコール依存症治療プログラムを開発し、アクションリサーチを行った。その結果、患者主体の多様な介入が可能となる新たな方策であることが示唆された。

井上・井上(2008)は、児童養護施設の子ども支援担当職員に対し、解決志向ブリーフセラピーのアイデアとサ

インズ・オブ・セーフティー・アプローチ（児童虐待領域での協働的アプローチ）の支援ツールを用い、子どもとの話し合いスキルを向上させる一連の研修と協働研究を行った。評定値の変化やアンケートから効果が確認され、子ども支援スキルが日常でも活用されていることが示された。

4. 臨床心理的地域援助に関連する研究

(1) サポートグループ

良原 (2009) は、自死遺族のサポートグループ運営者 8 名の喪失をめぐる物語構成の変容過程について、グラウンデッドセオリーに準拠して検討した。運営者は、語り手にも聴き手にもなり、「喪失体験」という同一性の共有によってグループ内相互支援が可能となった。運営者自身もグループを通じて自己効力感を獲得し、自己の喪失体験の物語を統合し、新たな生活世界の再生を果たしていた。

板東 (2008) は、引きこもり者が「居られる」ためのサポートグループ活動について、特徴的な 3 事例の検討から、当事者目線、淡々とした雰囲気、親しくならず孤立しない、互いの受容などの要件を挙げ、他のグループ活動とは異なる特徴があることを示した。

伊藤 (2009) は、不妊治療施設における相互支援のためのグループの利用の仕方を検討することにより、不妊で困っている女性についての心理臨床学的理解とグループの少数回利用の意義を考察した。

(2) 子育て支援、地域支援ネットワーク

谷田・青木 (2009) は、母親から見た夫婦間の相互性が、地域ネットワークを介して、子育てに対する感情に影響を与えることを定量的に明らかにした。心理学的アプローチによる子育て支援で、家庭の関係性に困難が認められる場合、地域の中での関わりを積極的に考慮する選択肢が見出された。

子育て支援に関しては、親教育プログラム“Nobody's Perfect (完璧な親なんていない)”の参加者アンケートに基づく質的研究が報告された (小椋・高岡・伊藤, 2009)。

杉岡・兒玉 (2007) は、日系人児童・生徒支援のための、学生ボランティアを含む個人レベルから地域レベルへの支援ネットワーキングについてアクションリサーチを行い、その発展と有効な要因を報告した。

III. 臨床心理学における今後の課題

(1) 全体的な研究動向

全体を概観すると、抑うつの研究が非常に多く、社会不安、関係妄想的認知など、認知療法理論を背景にしたものが目立ったが、どれもアナログ研究であった。次に、虐待、心的外傷、施設入所児に関する研究が目立ち、子どもたちの逸脱行為、問題行動、またそれと家族や養育

者との関連についての研究も多かった。抑うつと虐待/心的外傷は、昨今の現代社会を象徴する 2 大テーマとも考えられる。ストレスに関する研究は、心理的自己統制メカニズム、ダイエット行動、看護師のバーンアウト、育児ストレスなどであった。また、引きこもりや境界性人格障害の特徴が当事者調査によって実証的に明らかにされた。同性愛、難病といった、これまで十分な心理学的支援がされてこなかった対象には、質的なアプローチがなされた。アセスメントの研究は、投影法が多かった。

介入プログラム効果の実証的な研究としては、暴力被害による PTSD 女性への治療的介入や学校ベースの抑うつ予防プログラムがあり、これも認知/行動療法的介入であった。心理療法技法としては、フォーカシング、高齢者への回想法、ブリーフセラピーなどの有効性が示唆された。従来型の支援では効をなさない更生施設入所者やアルコール依存症者などへの介入プログラムが開発され、さらに地域援助に益する方向性として、引きこもり、自死遺族、不妊治療者へのサポートグループや地域支援ネットワークに関わる研究や報告がなされた。

(2) 実践に根ざした立場からの批判的精神か？

認知行動療法への関心の拡大は、エビデンス・ベースドのモデルが科学研究に馴染みやすいということもある。しかし、認知行動療法において、例えば抑うつスキーマの「修正」の重視に対し、黒田・菊川 (2009) や細越・小玉 (2009) は、抑うつスキーマや悲観思考をむしろ「受容」することの意義を研究結果から見出している。認知行動療法におけるアクセプタンスへの流れの影響だろうか。福井 (2009) は高目標設置が一律に心身に好影響を与えるものではないことを示唆しており、これまで受け入れられてきたことを再検討して、異なる知見を示唆する研究もいくつか見られる。これが臨床実践に根ざした感覚や批判的問題意識からきているのなら歓迎したい。

(3) 研究知見をどう臨床実践に役立てるか？

例えば母親の抑うつと子どもへの不適切な養育を捉えた論文などが多かったが、それは、子どもや親への支援の必要性と方向性を見出すために用いられるべきものである。三鈷・濱口 (2009) の研究も、ペアレントトレーニングをわが国の支援で展開する際の、親の養育態度の検討を目的にしている。また、夫からのサポートが有効であるという知見が重要である一方で、情動的サポートが多すぎることは育児ストレスに悪影響があるという熊澤・濱口 (2009) の研究結果や、谷田・青木 (2009) の夫婦間の相互性が地域ネットワークを介して子育て感情に影響を与えるという実証知見は、子育てを母親一人の作業から、夫婦・家族の適切な支援につなげ、さらに地域ネットワークによる支えに広げていくという実践への具

体的な示唆を含むものである。親教育プログラムの名前にあるように、“Nobody’s Perfect”の発想を出発点とし、研究知見が、誰かを悪者にしたり、宿命論に陥るようなものにならないようにしたい。

(4) 虐待や施設入所児研究の今後の方向性は？

藤岡 (2008) は、虐待を受けた子どもへの修復的愛着療法を細心の配慮を払って紹介し、養育者、夫婦、児童養護施設職員との関係形成とその支援、また援助者側の共感疲労などを重要事項として取り扱っている。田丸他 (2009) の一連の子どもの権利擁護の観点からの調査研究や、施設職員への子どもとの話し合いスキルを向上させる研修 (井上・井上, 2008) のような実践は貴重であり、今後この方向性の研究のさらなる進展が望まれる。

(5) 研究の倫理的配慮は十分か？

当事者への調査による研究は貴重であるが、例えば蔵本 (2008) には、倫理的配慮について何も言及されていないのが気がかりである。一方、吉田他 (2008) では、書面による説明と同意、大学倫理委員会の承認、またセラピストの臨床経験や当該プログラムの訓練経験などが明記されていた。他の論文でここまで明記されているものは少なかった。

(6) プログラム評価研究への認識や進展は？

プログラム(実践・活動)が、人々のニーズに応えているか、目的は何か、そのプログラム設計(内容)でいいか、適切な実施・運営か、必要な人に届いているか、効果を上げているか、意図されない効果が生じていないか、費用や効率性はどうか、などについて、適切に示しうる科学的な根拠や方法となるものが、「プログラム評価」である。プログラム評価には、目的によって、①プログラムの改善・発展のための形成的評価、②説明責任のための総括的評価、③知識生成のための学術的研究評価、の3種類がある(安田・渡辺, 2008)。吉田他 (2008) の治療的介入や佐藤他 (2009) の抑うつ予防プログラムの効果研究は、③に該当する研究(理論的基盤に基づきデザインされたプログラムが機能し効果的かを評価する研究)であり、貴重であった。今後、臨床心理学研究において、プログラム評価研究の広い範囲での進展が強く望まれる。

(7) アセスメント研究の活性化は？

アセスメント研究では、例えば投影法とそれ以外の心理テストとを組み合わせたり、既成の心理テストの新たな利用などの研究は見当たらなかった。障害リスクのスクリーニングや障害の段階評定表など、臨床的实践に有用な精度の高いツールの開発をもっと期待したい。見立てとは、生物—心理—社会の総合モデルによるものである。このような見立てに貢献するようなアセスメント研究が、強く求められる。

(8) 社会的要請課題への臨床心理学のチャレンジ

治療や改善に対し動機付けの低くなりがちな対象者へのプログラムの開発は、臨床心理学実践がコミュニティ場面に拡大されればされるほど、今後さらに必要となると考えられる。専門家から技法やプログラムを提供するという従来通りの発想から、対象者と協働してプログラムをつくっていくという姿勢とそのためのコミュニケーション技術が重要となるだろう。ブリーフセラピーに関する研究も増えつつあるが、ブリーフセラピーのノウハウはそこに貢献できる可能性もあろう。

また、社会的弱者やマイノリティの人々を理解し臨床実践に役立てるための、臨床心理学的な観点からのエンパワーメントにもつながる研究は、今後さらに必要であろう。今回は、HIV、ターミナルケアなどに関する研究、危機介入に関する研究は見当たらなかった。遺族については、良原 (2009) や、浅井 (2009) の配偶者を亡くした遺族に関する展望研究に限られた。

一方、援助対象が困難になれば、援助職側の困難、例えば共感疲労、バーンアウト、2次的心的外傷なども増していく可能性がある。臨床心理学は、援助者側のスキルアップに役立つ実践や研究、ヒューマンサービス従事者のメンタルヘルスの向上、チームやネットワークづくりにも貢献する実践と研究が求められていよう。

引用文献

- 安部康之・大谷 恵・長谷川千種 (2008). 解決志向ブリーフセラピーを取り入れたアルコール依存症治療プログラムの開発 ブリーフサイコセラピー研究, 17, 5-17.
- 安藤智子・無藤 隆 (2009). 妊娠期から産後1年までの抑うつと養育態度に関する要因の検討 家族心理学研究, 23, 36-47.
- 青木佐奈枝 (2009). ロールシャッハ・テストに見られる心的外傷性の解離 心理臨床学研究, 27, 129-139.
- 浅井真理子 (2009). 配偶者を亡くした遺族の心理状態と対処行動に関する国内外の研究動向 カウンセリング研究, 42, 71-80.
- 板東充彦 (2008). ひきこもり者が「居られる」ためのサポートグループ活動の特徴に関する考察—特徴的な3事例の検討を通して— 心理臨床学研究, 26, 493-498.
- 出野美那子 (2008). 児童養護施設における青年期前期の子どもの愛着状態と心的外傷性症状 発達心理学研究, 19, 77-86.
- 藤木美奈子 (2008). 更生施設におけるグループワークを用いた社会復帰支援プログラムの検討 コミュニ

- ティ心理学研究, **11**, 162-176.
- 藤岡孝志 (2008). 愛着臨床と子ども虐待 ミネルヴァ書房
- 藤田裕一 (2009). 青年期における身体障害者の精神的健康 教心 **51**, 93.
- 福井義一 (2009). 高目標設置は本当に適応的か?—成人愛着スタイルを調整変数として— 心理学研究, **79**, 522-529.
- 福井義一・三宅由晃・岡崎 剛・森津 誠・遠山 敏・山下景子・岡田信吾・安藤 治 (2008). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親図版解釈仮説の妥当性に関する研究—図版評定法を用いて— 心理臨床学研究, **26**, 549-558.
- 畠 秀和・栗山和広・鶴 紀子 (2009). 社会的引きこもり事例に関する旅行療法の研究 教心 **51**, 289.
- 林 潤一郎 (2009). 先延ばし後の思考内容と感情の関連—先延ばし傾向に着目して— 心理学研究, **79**, 514-521.
- 細越寛樹・小玉正博 (2009). 悲観的思考の受容が対処的悲観者の心身の健康に及ぼす影響 心理学研究, **79**, 542-548.
- 井上 薫・井上直美 (2008). 子どもの願いに耳を傾ける—児童養護施設職員との共働研究— ブリーフサイコセラピー研究, **17**, 37-47.
- 石坂昌子 (2009). 死の意味づけ尺度作成の試み 心理臨床学研究, **26**, 734-740.
- 伊藤弥生 (2009). 不妊で困っている女性についての心理臨床学的理解—不妊治療施設における相互支援のためのグループの利用の仕方の検討— 心理臨床学研究, **27**, 237-242.
- 梶谷奈生 (2008). 女性同性愛者のセクシュアリティ受容に関する一考察 心理臨床学研究, **26**, 625-629.
- 笠原正洋 (2009). 園内での虐待判断, 報告及び通告に関する現職保育士の意味決定過程に影響する要因 教心 **51**, 544.
- 加曾利岳美 (2009). 抑うつ傾向大学生に見られる自動思考の特徴 心理臨床学研究, **27**, 17-28.
- 加藤 司・谷口弘一 (2009). 許し尺度の作成の試み 教育心理学研究, **57**, 158-167.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, **56**, 353-363.
- 菊岡藤香 (2008). 多発性硬化症患者の語り分析から考える心理援助 ブリーフサイコセラピー研究, **17**, 67-79.
- 小林佐知子 (2009). 乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連 発達心理学研究, **20**, 189-197.
- 幸田紗弥華・菅原健介 (2009). 女子大生のダイエット行動とストレスが Binge Eating に及ぼす影響 心理学研究, **80**, 83-89.
- 児玉恵美 (2009). 性同一性障害の自我境界と自己イメージについて 心理臨床学研究, **27**, 230-236.
- 小堀彩子 (2008). 看護師のバーンアウト促進・抑制要因としての共感性—調整変数を考慮に入れた検討— 心理臨床学研究, **26**, 559-567.
- 熊澤詩織・濱口佳和 (2009). 父親の育児サポートと母親の育児ストレス並びにマルトリートメントの関連 教心 **51**, 317.
- 蔵本信比古 (2008). 社会的ひきこもりに関与する心理的特性の検討 心理臨床学研究, **26**, 314-324.
- 黒田祐二・菊川真衣 (2009). 抑うつスキーマを受容することにより抑うつは低くなるか?—抑うつスキーマを修正することが全てではない— 教心 **51**, 600.
- 黒沢幸子 (2008). 学校コンサルテーション・SFA モデルの利点と課題—訓練ワーク 3 事例の検討から— ブリーフサイコセラピー研究, **17**, 18-36.
- 牧 郁子・坂井円香 (2009). 大学生における理想自己—現実自己のギャップの認知が自己受容・対人不安に与える影響 教心 **51**, 84.
- 松本明夫 (2008). イメージ療法におけるイメージの体験過程に関する研究—イメージ体験の深まりを評定する試み— 心理臨床学研究, **26**, 269-278.
- 内藤綾子・高橋千枝・田丸敏高 (2009). 児童養護施設児の生活と「子どもの権利」理解(2)—子どもの権利ノート理解— 教心 **51**, 421.
- 西村大樹・東條光彦 (2009). 摂食障害発症危険者スクリーニングテストの妥当性の検討 教心 **51**, 292.
- 西野泰代・氏家達夫・二宮克美・五十嵐 敦・井上裕光・山本ちか (2009a). 中学生の逸脱行為の深化に関する縦断的検討 心理学研究, **80**, 17-24.
- 西野泰代・氏家達夫・二宮克美・五十嵐 敦・井上裕光・山本ちか (2009b). 自己価値の変動と問題行動との関連についての縦断的検討 教心 **51**, 11.
- 野村信威 (2009). 地域在住高齢者に対する個人回想法の自尊感情への効果の検討 心理学研究, **80**, 42-47.
- 小椋知子・高岡昂太・伊藤 真 (2009). 親教育支援プログラム“Nobody's Perfect (完璧な親なんていない)”の参加者アンケートによる質的研究(1)—参加者が評価する NP プログラムの構造— 教心 **51**, 271.
- 大原天青・楡木満生 (2008a). 児童自立支援施設入所

- 児童の被虐待経験と非行の関係 カウンセリング研究, **41**, 193-203.
- 大原天青・楡木満生 (2008b). 児童自立支援施設入所児童の行動特徴と被虐待経験の関係 発達心理学研究, **19**, 353-363.
- 岡田和久 (2009). ブリーフセラピー技法を効果的に
行うために留意すべきこと 心理臨床学研究, **26**, 641-651.
- 岡村寿代・清水健司 (2009). ネガティブな反すうの増減要因に関する検討 教心 **51**, 25.
- 奥村弥生 (2008). 情動への評価と情動認識困難・言語化困難との関連 教育心理学研究, **56**, 403-413.
- 大西将史 (2008). 青年期における対人恐怖的心性と対人不安の差異—罪悪感による両概念の弁別— 心理学研究, **79**, 351-358.
- 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2009). バウムテストの幹先端処理に関する基礎的研究—大学生のバウム画より— 心理臨床学研究, **27**, 95-100.
- 桜本洋樹 (2009). 心理面接における沈黙の一研究—体験過程スケールを用いた試行カウンセリングの分析を通じて— カウンセリング研究, **42**, 155-164.
- 三鈷泰代・濱口佳和 (2009). 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究(3)—親の養育スキルパターンと子どもの行動傾向との関連— 教心 **51**, 441.
- 佐藤 寛・今城知子・戸ヶ崎泰子・石川信一・佐藤容子・佐藤正二 (2009). 児童の抑うつ症状に対する学級規模の認知行動療法プログラムの有効性 教育心理学研究, **57**, 111-123.
- 佐藤安子 (2009). 大学生におけるストレスの心理的自己統制メカニズム—自覚的ストレスの高低による内的ダイナミズムの比較— 教育心理学研究, **57**, 38-48.
- 澤田忠幸 (2009). 看護師の職業・組織コミットメントと専門職者行動、バーンアウトとの関連性 心理学研究, **80**, 131-137.
- 下田芳幸 (2008). スケーリング・クエスチョンの数値の特徴に関する統計的検討—中学生の受験期ストレス下での“元気度”を基に— 心理臨床学研究, **26**, 353-357.
- 下坂 剛 (2009). 大学生における回避性人格傾向の研究—尺度作成と信頼性および妥当性の検討— カウンセリング研究, **42**, 109-117.
- 下山晴彦 (2001). 臨床心理学研究の多様性と可能性 下山晴彦・丹野義彦(編) 講座臨床心理学 2 臨床心理学研究 (pp. 3-24) 東京大学出版会
- 篠原光代 (2009). アルコール依存症者の否認と気づきの段階評定表の作成 心理臨床学研究, **27**, 76-87.
- 城月健太郎・笹川智子・野村 忍 (2009). スピーチに関する見積もりが社会不安に与える影響 心理学研究, **79**, 490-497.
- 杉岡正典・兒玉憲一 (2007). 滞日日系ブラジル人児童生徒支援のための支援者ネットワークの試み コミュニティ心理学研究, **11**, 76-89.
- 角 沙織・小関俊祐・高橋 史・山口真実・丹野 恵・石垣久美子・佐々木和義・嶋田洋徳 (2009). 中学生を対象とした抑うつ低減プログラムの実践 教心 **51**, 185.
- 鈴木公基・鈴木みゆき (2009). 中学生の物質使用と親の養育スタイルとの関連—応答性と自己意識の交互作用効果について— 教心 **51**, 529.
- 鈴木俊太郎・皆川州正 (2008). ソリューション・フォーカスト・アプローチにおけるクライアントの満足感について—協同問題解決満足感尺度による検討— ブリーフサイコセラピー研究, **17**, 80-90.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 鈴山可奈子・徳田智代 (2009). 夫婦関係および家族システムの機能状態が青年期の不安に及ぼす影響 家族心理学研究, **23**, 1-11.
- 高橋千枝・田丸敏高・内藤綾子 (2009). 児童養護施設児の生活と「子どもの権利」理解(3)—職員観と生活意識— 教心 **51**, 422.
- 高沢佳司・伊藤義美 (2009). フォーカシングの空間づくりが精神的健康に及ぼす効果 カウンセリング研究, **42**, 30-37.
- 田丸敏高・内藤綾子・高橋千枝 (2009). 児童養護施設児の生活と「子どもの権利」理解(1)—課題としての「子どもの権利」理解— 教心 **51**, 420.
- 田村和子・井上果子 (2009). 境界性人格障害の特異性について 心理学研究, **79**, 506-513.
- 寺崎文香 (2008). 高校生のロールシャッハにおけるM反応とFM反応の質的研究 心理臨床学研究, **26**, 420-431.
- 戸ヶ崎泰子・石川信一・尾形明子・佐藤正二・佐藤容子 (2009). 中学校における学校規模の抑うつ予防プログラムの効果(1) 教心 **51**, 598.
- 外山美樹・市原 学 (2009). 防衛的悲観主義者は適応的か? 教心 **51**, 46.
- 津田恭充 (2009). 被害的な関係妄想的認知の生起メカニズムの検討—情報補完の視点から— カウンセリング研究, **42**, 22-29.
- 山崎 暁・内田利広・伊藤義美 (2008). フォーカシン

グ的態度と自己注目が抑うつに与える影響 心理臨床学研究, **26**, 488-492.

安田節之・渡辺直登 (2008). プログラム評価研究の方法 下山晴彦(編) 臨床心理学研究法第7巻 新曜社

谷田征子・青木紀久代 (2009). 母親からみた夫婦間の相互性と子育てに対する感情との関連—地域ネットワークに着目して— 心理臨床学研究, **27**, 152-162.

吉田博美・小西聖子・井口藤子・加茂登志子 (2008). Prolonged Exposure Therapy の PTSD への効果研

究—暴力の被害を受けた女性10名に対して— 心理臨床学研究, **26**, 325-335.

良原誠崇 (2009). 自死遺族サポート・グループ運営者の喪失をめぐる物語的構成 心理臨床学研究, **26**, 710-721.

吉見摩耶・葛西真記子 (2009). 治療同盟と面接評価に影響を及ぼすクライアント側の要因—内的作業モデルと認知反応評定を通して— 心理臨床学研究, **27**, 29-39.